

ミカ書7：18～19

コリントの信徒への手紙一1：1～9

「聖徒の交わり、罪のゆるし」

(ハイデルベルク信仰問答 問55～56) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】【招詞】詩編96：1～3

【祈祷】

【聖書】ミカ書7：18～19、コリントの信徒への手紙一1：1～9

【説教】「聖徒の交わり、罪のゆるし」

<聖霊を信ず、の項目から>

礼拝では毎週、『ハイデルベルク信仰問答』から御言葉を聞いています。今は、教会が信じている信仰箇条を示した「使徒信条」の文言を、一つずつ紐解いています。

今日は、問55、56を見ていきますが、ここは「我は聖霊を信ず」という項目の中に入っている、「聖徒の交わり」と、「罪のゆるし」について語られています。

<聖徒の交わり／聖徒>

まずは、「聖徒の交わり」を信じる、という告白についてです。教会は、「聖徒の交わり」によって形作られている共同体です。「聖徒」とは、聖なる者、ということです。

聖なる者の交わり。ここで気を付けないといけないのは、この「聖なる者」というのは、清く正しい人、という意味ではありません。もしそうであるなら、わたしはここにいられない、ということになるかも知れません。

それに世の中では、時々、教会に通っている人はみんな清らかで、立派で、素晴らしい人ばかりだと思っている人がいます。わたしも昔、「教会へ通っている」と同僚に話した時に、「わあ、きよらか～」と言われて、困ってしまったことがありました。

でも、「聖なる者」というのは、教会に通っている人の性質や状態のことを言っているではありません。「聖」というのは、神さまが持つておられる、特別な聖さのことです。この、聖い神さまのものとされた人。聖い神さまに属している人、所有されている人。それが、聖なる者であり、聖徒なのです。

教会に連なっている人は、神さまのものとされた人たちです。では、どのように神さまのものとされたのでしょうか。

わたしたちは皆、神さまに背き、逆らい、罪の奴隷となっていました。罪と死に属している者でした。しかし、神の御子イエスさまが、わたしたちの罪を贖って十字架で死んで下さり、罪から解放して下さいました。そして、復活して、罪と死に打ち勝ち、わたしたちを神さまの愛によって支配して下さいました。

わたしたちは、このイエスさまの救いを信じたなら、洗礼を受け、聖霊によってイエスさまと一つに結ばれます。イエスさまと一体になります。そうして、わたしたちは罪を赦され、完全にイエスさまのものとなる。聖なる神さまに属するものとなる。そのゆえに、「聖なる者、聖徒」と呼ばれるようになるのです。

今日のコリントの信徒への手紙一 1:2 には、パウロがコリントの教会の人々に宛てて、このように述べていました。「コリントにある神の教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。」

そもそも、パウロがコリントの教会の人々に手紙を書いたのは、信仰的にも、生活的にも、コリント教会の人々に問題が沢山あったからです。コリント教会の人々は、ちっとも立派な信仰生活を送っている人たちじゃない。むしろ、迷ったり、間違ったり、墮落したり、大変困った状態になっていたようです。

でもパウロは、そのコリント教会の人々を、「キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々」といって、呼びかけるのです。

コリント教会の人々も、ここにいるわたしたちも、現実を見れば問題だらけです。信じて、救われても、なお罪深く、疑って、迷って、躓いてばかりです。

でも、それにも関わらず。わたしたちの、そんなどうしようもない実情にも関わらず。神さまは、わたしたちをご自分のものとして下さった。イエスさまによって、罪をゆるして下さり、罪深いわたしたちを、聖なる神さまの子どもとして、受け入れて下さった。

この、神さまがわたしたちをご覧になる、神さまの見ておられる現実において、わたしたちは「聖なる者、聖徒、神さまのもの」なのです。

教会に連なる一人一人が、神の御子イエスさまが、ご自分の命を犠牲にして救い出し、罪を贖って下さった一人一人です。神さまが捜し出し、連れ帰り、喜んで迎え、ご自分の愛する子どもとして受け入れて下さった一人一人です。

教会とは、そのように、イエスさまに救われて、神さまのものとされた人々、神さまに「聖なる者」とされた人々の群れなのです。

<交わり>

使徒信条は、その「聖徒」の「交わり」を信じる、と告白しています。神さまに聖なる者とされた人々の、交わりを信じる。

この「交わり」も、教会でよく使われる言葉ですけれども、これは「楽しい交流」や、「親しい人付き合い」を意味しているわけではありません。

聖書の「交わり」という言葉は、「コイノニア」という言葉で、これは「共有する」とか「分かち合う」という意味です。一つのを、共有し、分かち合うことを「交わり」というのです。

では、教会に連なる、聖なる者たちが共有しているものとは何でしょうか。

それは、お一人のイエスさまです。一人一人が、十字架と復活のイエスさまに救われ、結ばれている。そのイエスさまは、お一人の、同じイエスさまです。言い方は変かも知れませんが、わたしたちはお一人のイエスさまを、一緒に持っている。お一人のイエスさまを、共有しているのです。同じイエスさま、同じ救い、同じ罪のゆるし、同じ復活の約束。わたしたちは、一緒に、同じ一つの恵みにあずかっています。この、一緒にイエスさまにあずかっている群れ、共同体が、「聖徒の交わり」と呼ばれるのです。

そうであるなら、「聖徒の交わり」を信じる、というのは、この教会の群れが、神さまのものであると信じること。この群れが、イエスさまによって結ばれている群れであると信じること。そして、この群れの一員であるわたし自身も、確かに神さまのものであり、イエスさまに与っているのだ、と信じることなのです。

ハイデルベルク信仰問答の間 55 には、こうあります。

「問 55 『聖徒の交わり』について、あなたは何を理解していますか。」

「答 第一に、信徒は誰であれ、群れの一部として、主キリストとこの方のあらゆる富と賜物にあずかっている、ということ。」

ここには、「信徒は誰であれ」、群れの一部である。「信徒は誰であれ」、主キリストとこの方のあらゆる富と賜物にあずかっている、と語られています。

信徒は誰であれ。イエスさまを信じた者は誰であれ、必ず、教会の一員、群れの一部、聖徒の交わりの一人に入れられます。それは、他の救われた人と一緒に、同じお一人のイエス・キリストに結ばれているからです。誰も例外はありません。信仰を持って、一人で歩むということは、絶対にありえません。

わたしが、イエスさまを信じて救われる、ということは、わたしが「聖徒の交わり」に入れられる、ということと一体です。わたしたちは、この「聖徒の交わり」の中でしか、群れの中でしか、教会においてしか、まことの信仰の歩みをすることは出来ないのです。

わたしたち一人一人は、イエスさまと出会い、この方を信じ、この方と結ばれます。それは同時に、イエスさまを信じる群れの一部となり、他のイエスさまに結ばれた人々とも一つになるということです。そして、一人のわたしは、群れの一部として、全体の中で、イエスさまご自身と、この方のあらゆる富と賜物にあずかるのです。

<賜物を分かち合う>

そこで、問 55 の答えの「第二に」というところに繋がります。こうありました。

「第二に、各自は自分の賜物を、他の部分の益と救いとのために、自発的に喜んで用いる責任があることをわきまえなければならない、ということです。」

教会に属している一人一人には、それぞれに与えられている「自分の賜物」があります。

それは、得意なことや、能力、技術。他にも、富を持っていること、体力があること、時間があること、忍耐強さ、人を和ませる性格…など色々です。

しかし、「お一人のイエスさまが」、それぞれに与えて下さった富と賜物は、決して自分のためだけに使うようにと、与えられたものではありません。

その賜物は、本来イエスさまのものであり、イエスさまに結ばれている、聖徒の交わり、神さまの共同体、群れ全体のものであり、それを、わたしが用いるように託されている、ということなのです。

聖書では、イエスさまに結ばれたわたしたちは、イエスさまを頭として、その体を形作っている部分である、と言われます。一人一人が、体にとってそれぞれ必要な場所に置かれた、手であり、足であり、目であり、耳であり、そうして、わたしたちは一つのイエスさまの体を形作っているのです。

体の部分部分は、それぞれ役割が違います。でも、たとえば手は、手だけのために動くのではなくて、体全体が生きるために必要な動きをするはずで。

同じように、わたしたち一人一人に与えられた賜物も、自分の利益のために用いるためではなくて、聖徒の交わりのために、群れ全体のために、イエスさまの体全体のために、用いるべきものとして与えられているのです。

それをハイデルベルクは、群れの一部である者の「責任だ」と言っています。

全体のために、部分である自分が働く。賜物を使う。それは、自分には得がないように思えるでしょうか。人のためにばかり使うのは、損でしょうか。そうではありません。

わたしが与えられている賜物を、全体のために使う、ということは。わたしが持っていない賜物も、それを持っている他の誰かが差し出してくれる、ということです。

まさに、お互いに与えられている賜物を、共有する。分かち合う。そのことで、体全体が、群れ全体が、生き活きと動くことが出来る。お互いに賜物を分け合うことで、一緒にますます豊かにされていく。

だからこそハイデルベルクは、与えられた賜物を、わたしたちは「自発的に喜んで用いる」ことが出来る、と語っているのです。

そして、それを豊かにして下さるのは、わたしたちの中心におられ、わたしたちを結び合わせておられるイエスさまであり、わたしたちをご自分のものとして下さった、神さまに他なりません。

そのように、お一人のイエスさまに結ばれて、救いに共にあずかって、賜物を分かち合っ

<罪のゆるし>

そのように、「聖徒の交わり」として歩む教会は、まさに神さまと共に生き、隣人と共に生きる群れです。それは、この地上にあって、神さまの恵みのご支配の中で、愛し合い、赦し合う、理想的な共同体を、体現するものとなるはずで。

しかし、わたしたち地上の教会の歩みは、決して完璧ではありません。それに、決して神さまが求めておられるような、理想的な交わりを築けているわけでもありません。

わたしたちは、確かに神さまのものとされた、聖なる者たちの共同体です。しかしそれは、裏返して言えば、神さまに、ただ憐みによって赦していただくしかなかった、罪人の集まりである、ということです。

わたしたちは、罪を赦された者たちの共同体です。神さまが、罪を赦して下さいました。あなたの罪は、御子イエス・キリストの十字架の血によって贖われた。あなたはもう、罪には捕らわれていない。もう罪の奴隷ではない。聖なる神のものである。そう宣言して下さいました。

しかし、わたしたちにはまだ、罪との戦いが必要です。罪の赦しを宣言されたのに、神さまに背いてしまう。自己中心的な歩みをしてしまう。人を愛せない。赦せない。傷つけあってしまう。そのような、日々、自分の罪深さに、弱さに、打ちのめされる歩みをしています。

しかしハイデルベルクは、ここで改めて、大きな慰めを語るのです。

「問 56『罪のゆるし』について、あなたは何を信じていますか。」「答 神が、キリストの償いのゆえに、わたしのすべての罪と、さらにわたしが生涯戦わなければならない罪深い性質をも、もはや覚えようとはなさらず、それどころか、恵みにより、キリストの義をわたしに与えて、わたしがもはや決して裁きにあうことのないようにしてくださる、ということです。」

わたしたちは使徒信条で、「罪のゆるし」を信じる、と告白します。

それは、「神が、キリストの償いのゆえに、わたしのすべての罪と、さらにわたしが生涯戦わなければならない罪深い性質をも、もはや覚えようとはなさない、ということ」を信じているということです。

「わたしのすべての罪」。神さまに背いた罪。神さまを愛せない罪。隣人を愛せない罪。それをキリストの償いのゆえに、赦して下さい。

そしてさらにここでは、「わたしが生涯戦わなければならない罪深い性質」がある、と語っています。わたしたちは、救いに与ってもなお、いまだ、罪深い性質に捕らわれています。それは生涯、死ぬまで戦わなければなりません。終わりの日に、イエスさまが救いを完成して下さいるまで、わたしたちは罪との戦いを続けなければなりません。

しかし、神さまは、キリストの十字架の償いのゆえに、そのわたしたちの罪を、「もはや覚えようとはなさない」と言います。もう、イエスさまの救いに与ったなら、これからずっと、罪をゆるされた者として、わたしのことを見て下さる。未だ繰り返す罪、未だ捕らわれている罪がある。しかし、もうその罪は数えないでおこう。覚えないようにしよう。あなたの罪を赦した。この赦しは、あなたに生涯有効だ、と言って下さるのです。

そして、後半の文章に繋がります。「それどころか、恵みにより、キリストの義をわたしに与えて、わたしがもはや決して裁きにあうことのないようにしてくださる」。

神さまは、罪を赦して下さり、もう一切、わたしの罪を覚えてない、と言って下さる。

しかも、それどころか。罪を赦す、というだけでなく。恵みによって、キリストの義を、わたしに与えて下さる。罪人のわたしを、イエスさまの義で、正しさで、覆って下さり、わたしを「正しい者」として、見て下さるというのです。

罪を赦された。しかしなお、罪深い性質を持つわたしたちです。そのわたしの罪の残骸をも覆い隠すように、神さまは、わたしたちに、イエスさまの潔白の衣を着せて下さる。わたしの罪を赦して下さる、というだけでなく。わたしを、正しい者、神さまに従順な者、神さまに喜ばれる者として、見て下さるのです。

それは、終わりの日にも、決して裁きにあうことがない、ということです。イエスさまが再び来られる日、最後の審判の時にも、わたしたちは「義なる者」、「神さまの目に正しい者」として、御前に立つことが出来る、というのです。

それは、イエスさまが、わたしたちの罪を覆って下さるから。わたしたちが、十字架の死に至るまで父なる神さまに従順であられたイエスさまご自身を、上から着ることをゆるされているからです。

これまでの罪も、今の罪も、そして将来の罪も。もう神さまは覚えてない、裁かない、と言って下さる。そしてわたしたちは「キリストの義」をいただいている。

わたしたちが「罪のゆるし」を信じる、と告白する時。それは、それほどの恵みを信じる、ということなのです。

そうであるならば、わたしたちの罪との戦い方も見えてきます。それは、必死に抵抗して、ぼろぼろになって、もしかしたらダメかも…というような戦いではありません。

イエスさまによって、もう罪は克服されている。神さまが、わたしに「キリストの義」を与えて下さり、罪を裁かないと言って下さっている。神さまの御前で、罪は、もうわたしに対して何の力もないのです。

この神さまの「罪のゆるし」のもとで、わたしたちは罪に抵抗していく。罪の支配を振り切って、神さまの愛の支配の方に、身を委ねていく。

そうして、わたしたちは、共に神さまに罪を赦され、共にキリストの義をいただいた者として、一つの体として、一つの共同体として、一緒に歩いていくのです。

「聖徒の交わり」「罪のゆるし」。罪のゆるしは、目には見えません。しかし、神さまにあって、確かに与えられている恵みの現実です。この罪のゆるしに与った者たちが、築き上げている群れが、「聖徒の交わり」なのです。

そうであるなら、神さまの目に見えない「罪のゆるし」の恵みは、目に見えるこの「聖徒の交わり」において、目に見える地上の教会において、今ここに、わたしたちの群れが集められ、生きていることにおいて、具体的に表れされているのだと言えます。

この群れにあってこそ、わたしたちは、見えない神さまの罪の赦しを、確かなものとされ、イエスさまの十字架の贖いの恵みをさらに深く味わい知り、群れ全体で、信仰を強められ、恵みをより豊かに受け取って、歩いていくことが出来るのです。

そうして、一つの体として生き活きと歩いていく教会の姿が、神さまの栄光をあらわすものとされるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちの罪の償いのために、御子イエスさまを与えて下さり、その十字架によって罪を赦し、聖霊によってイエスさまと結び合わせ、聖なるあなたの子どもとして受け入れて下さったことを感謝いたします。

共にイエスさまに結ばれ、共にあなたのもものとされた兄弟姉妹と共に、わたしたちは聖なる交わりに生きる者とされ、賜物を分かち合い、恵みを分かち合い、イエスさまのもと、一つとなって歩む恵みが与えられています。

そして、罪を赦された者たちの共同体であるこの群れにあって、わたしたちは、あなたの罪の赦しを、キリストの義をいただいた恵みを、ますます深く味わいます。

その喜びと感謝に溢れて、この群れの歩みが、あなたの栄光を、驚くべき救いの御業を、この地上で証しするものとされますように。

また、このイエスさまの体に、聖なる交わりに、一人でも多くの者が招かれ、罪を赦され、一つに結ばれ、共に、キリストに、またそのすべての恵みと賜物に与れますようにと、心から祈り願います。

このお祈りを、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 393 「こころを一つに」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン